建築における暗黙知
身体性をもって距離を近づける

指導教員　吉松秀樹教授　印　　1BEB2130　伊藤　信舞

1. 建築との距離を感じる

屋外の芝生の公園は地面と近いと感じるが建築空間おいて近いと感じることが少ない。家、学校、駅など空間が大きくなる程建築の身体性はなくなり建築との距離を感じた(Fig. 1, 2)。

Fig. 1　近いと感じられる公園

Fig. 2　遠いと感じられる自室と駅

2. 日本建築が持つ近さ

日本建築は靴を脱ぎ床と直接触れることや、畳で寝たり食事をしたり、建具が可動式であるなど、一つの場所で多様な使い方が出来る。建築と家具の境界が無く、部屋自体が身体にまとわりついている感覚が「人と建築が近い」と感じさせる要因である(Fig. 3)。

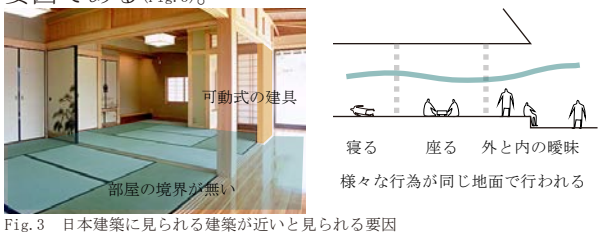

Fig. 3　日本建築に見られる建築が近いと見られる要因

3. 近いと感じる身体的関係

効率化を求め建築と家具は分離した結果、人と建築の距離は遠くなった。意図を明確に示した形態でなくても、私たちはそこでの行為を無意識に判断できることから、身体性を持つことで人と建築が近くなると考えた(Fig. 4, 5)。

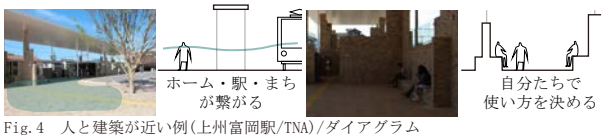

Fig. 4　人と建築が近い例(上州富岡駅/TNA)/ダイアグラム

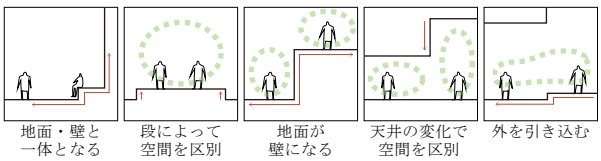

Fig. 5　身体性をもった建築の手法

4. 内と外を繋ぎながらアクティビティをつくる

周囲を引き込みながら内部をつくることで、地面との距離を近くに感じながら空間　へ影響を与える(fig. 6, 7, 8, 9)。

Fig. 6
壁を用いて外を引き込む

Fig. 7
地面を持ち上げ壁と一体

Fig. 8
段を結び、流れをつくる

意図を示した形態ではなく、単純で抽象的な形態は、想像力と創造力に訴えかける。

Fig. 9　模型写真

5. 人・建築・まちが繋がるギャラリーを提案

隙間の無い密集した都市の中で、まちの人が自由に使える共有場所をつくる。まちと一体となった建築は人とまちを繋げる。

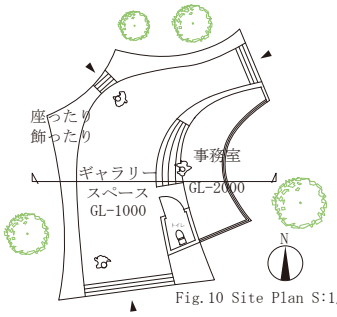

Fig. 10 Site Plan S:1/250

地面から登れる屋根によって建築と地面は一体化し、レベルを下げた内部へ引き込まれ、建築との距離を近づける。

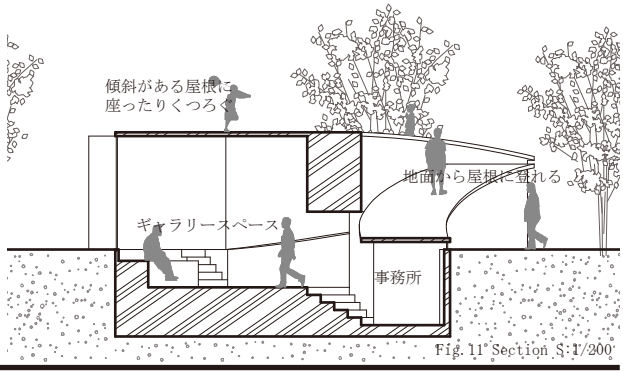

Fig. 11 Section S:1/200